

## 仏師北川運長と浄厳—八尾教興寺の造像を中心に—

桑野 梓（茨木市立文化財資料館）

大阪府八尾市の教興寺は、聖徳太子が物部守屋討伐を祈願し、秦河勝に命じて建立したとされる古刹である。鎌倉時代には荒廃していたとされるが、文永6年（1269）に叡尊（1201～1290）によって復興する。一時は西大寺の末寺として重要視されていたが、その後、兵火によって伽藍を焼失し、再び荒廃していた。江戸時代に入ると、延宝7年（1679）に尊学（忍空）より譲られた覚彦浄厳（1639～1702）が西大寺末の真言律院として再興し、今日に法灯を伝える。

今回、八尾市史編さんに伴う文化財調査に参加する機会を得、教興寺諸像について詳細に調査する機会を得た。なかでも本尊の弥勒菩薩坐像は、像高 143.5cm、台座高 169.5cm を測る大型の像であり、像内の銘文から、元禄9年（1696）に法橋運長により制作されたことが判明した。運長とは「京都御室大仏師」「仁和寺門前大仏師」などと自称する北川運長（？～1755）のことで、運長は、浄厳や弟子の蓮体に関わる造像を数多く担っていた仏師であることが既に指摘されている。教興寺には本尊以外にも、運長の作と考えられる弘法大師像や聖徳太子像などの作例が確認できる。

ここではまず教興寺の本尊である弥勒菩薩像について、作風や構造、その造形について概要を述べる。次に教興寺のその他の像についてもみていき、「浄厳大和尚行状記」などの記録や作風から、運長の作例について絞り込む。これら教興寺の諸像を通じて、運長の造像活動における、浄厳の関与について指摘する。すなわち、関西における真言教法の根本道場とするべく、伽藍の復興に尽力した浄厳の意向が、その安置される像の選択に反映されていることを指摘する。また浄厳は、西大寺末としての教興寺の再興について、聖徳太子ゆかりの寺院として、鎌倉期の復興を成し遂げた叡尊の意志を受け継ぎながらも、自身の教団の樹立をめざしていたことが指摘できる。教興寺諸像にみられる緊張感や洗練された造形には、このような浄厳の構想が大きく関わっている点を指摘する。

次に教興寺以外の運長作例についてもみていき、運長の事績について確認する。運長の数ある事績の中で、教興寺における造像が、最初期のことと位置づけられ、これを契機として、真言教団の中でその活動範囲を広げていき、多くの造像、修理を経て近世仏師として実力をつけていく様相についても明らかにする。運長が浄厳との関わりの中で行った造像にとどまらず、寺院や僧、教団などの繋がりを通じた造像を行っていることを指摘し、近世仏師の造像活動の一例として示したい。